

この役者（ひと）この一本

古里靖彦*

はじめに

当初は、『脇役は、映画の主役～横から見た映画論～』ということで、小映画論を書こうとしたのだが、すぐに断念した。思いのほか難しい。書きたい俳優さんは、あまり知られていない人が多い。それならと、映画を何本か見ている内に、この俳優のこの映画の存在感は、凄いと思う映画に何本か出会うこととなった。それは、主役でも脇役でもチョイ役でも関係なくである。もともとこの文章は、廃れつつある日本映画の面白さを少しでも知ってもらい、大勢の方に、一本でも多く日本映画を見てもらおうという意図であるから、この文章を読んで少しでもその気になってもらえれば、それで目的は、十分に達成できるからである。

ただ、お断りしておきたいのは、たかが私の、限られた経験、作品、薄れた記憶、独断と偏見に基づく選定であるから、非常に偏っている。それは、勘弁してもらいたい。プロの評論家淀川長治さんや映画監督の大林宣彦さんの域には及ぶべくもないし、及ぶつもりもない。一瞬の判断というものは、意外に優れているものだ。今後他の作品を見ることとなっても評価が変わることはない。

1. 中野良子～君よ憤怒の河を渡れ～

書きたい俳優さんがたくさんいる中、中野良子さんからはじめる。この俳優さんについては、それほど印象に残る作品もないが、実はこの文章を書こうと思い立ったのは、最近なんとなく再見し

た中野良子さんのある映画での演技によるからである。それは、『君よ憤怒の河を渡れ』。当時大流行作家であった西村寿行の同名の小説を原作とした、佐藤純彌監督によるサスペンスアクション映画。高倉健さんの主演映画である。タイトルの『憤怒』は『ふんど』と読むが、原作本は、『ふんぬ』と読む。ふんぬが普通であるが、ふんどの方が映画らしいということか。因みに、西村寿行の原作は読んだことはない。

さて、映画であるが、高倉健さん扮する熱血検事が政界の大物の悪事を暴こうとして、陰謀に巻き込まれ、殺人事件の犯人にされる。自分の無実を晴らすために孤軍奮闘する映画である。それを助ける、北海道の富豪の娘役が中野良子さん。映画自体は、最初から最後まで、ドタバタしており、無理な展開も多く、それほど出来がいいとは思わない。ところが、中野さんの存在がいやに光っているのだ。この映画の救いとも言える。映画というものは、本来は、大したものではないのいいところで、たった一箇所でもいいところがあるだけで、人生得したような気になるものである。こんな人が存在するとは思えないが、それを実に存在感を持って演じている。いてくれると人生がよくなるのだ。昔見たときは意識しなかったが、今回再見して感動した。この救いのない映画が、最後に高倉さんと腕を組んで街中を歩くシーンで一気に救われる。その時の、彼女の爽やかな笑顔で、明るい気持ち、爽やかな心地にされるのである。関係ないが、今、火野正平さんが自転車で旅をする番組があり、最後に、こころこころと字幕がでるが、正しくその気持ちになる。

蛇足ではあるが、この映画には、若き原田芳雄さんが、高倉さんを執拗に追跡する刑事役で出演

2012年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科教授 e-ビジネス

しており、泥臭い演技をしているが、これが、彼の本質のような気がする。悪くはない。又、ヤクザ映画で生涯の同僚であった、池部良さんが、上司の検事役で控えめな演技をしているが、役割自体が存在感のない、いい人でもない役柄で、あまり採らない。

この文章では、いい点数の時は、採る、良くない時は、採らないという表現にします。評価する、しないということは、僭越だから。自分の感覚に合う、合わないくらいの軽い気持ちである。

ほかに注目すべき作品は、『お吟さま』、『人間の証明』などか。『憤怒』が、中国で大変に評価され、中国では、最も有名な日本女優となっている。

2. 藤 竜也～しあわせのかおり～

変化の激しい役者さんである。若い頃は、アクション映画のチョイ役、大島渚監督の『愛のコリーダ』に出演。その中で、『しあわせのかおり』と『村の写真集』を採りたい。彼の本質からすると、どちらも、甘すぎる人生の感じはあるが、この殺伐とした世の中、両映画とも鑑賞後、いい心持ちになる。いずれも、頑固一徹、その道一筋の職人さんの話で、前者は、中国出身の中華料理人、後者は、小さな村の写真館の写真屋さんである。どちらも、おそらくは、相当な腕前の職人であるのだろうが、決して、有名になりたいとかの意思はなく、ただ、自分の仕事に忠実であるだけである。実際、世の中には、このような名人が星の数ほど存在するのであろう。又、この文章を書いていて、初めて気がついたのであるが、監督は両作とも三原光尋監督である。ひょっとしたら、藤さんというよりは、この監督が私の感性にあったのかもしれない。そんな監督が、何人かいる。黒木和夫さん、大林宣彦さんなどである。いずれ、好みの監督、好みの作品も書いてみたい。

余談はさて置き、本題に戻る。『しあわせのかおり』は、2008年に公開された三原光尋監督、中谷美紀主演の映画である。中谷美紀さんは、デパートの営業マンで、藤さん扮する王の中華料理

店にデパートへの出店を頼むうちに、病で料理ができなくなった王のもとへ、弟子入りし、料理の修行をすることとなる。厳しい訓練と失敗とを重ねるうち、王がお世話になった人から食事会の依頼が来る。王は、最初は断るのであるが、たつての依頼で、料理を彼女に任せることに決める。王は彼女を、紹興酒を仕入れるために、故郷、紹興に連れていき、娘だと紹介する。とにかく、藤さんの中華料理人がなんとも素晴らしいのであるが、それに弟子入りする中谷美紀もいい。この女優さんには、実際に会ったことがある。本当に口数の少ない愛想の悪い人であるが、演技となると実に輝く人である。『7月24日通りのクリスマス』、『JIN 一仁一』の花魁野風など見るべきものは多い。

まずは、見て下さい。料理のシーンが実にいい。実際に美味しい料理が多数登場する。これだけでもこの映画を見る価値があるが、中でも『トマトと卵の炒めもの』という料理がいかにもうまそうだ。因みに私の大好物が卵、大の苦手がトマト、さてどうしたものか。と思うが、この料理なら食べてみたいと思う。料理が主役という、グルマン池波正太郎さんの『鬼平犯科帳』や、『剣客商売』が挙げられるが、これらより、もっとリアリティがある。考えてみれば、中華料理というものは、一つの中華鍋でなんでも作る。塩、醤油などもすべて、一つのおたまで注ぐ。そうか、中華は、作る時が全てなのだ。などと考えさせられるのだ。紹興酒を買い付けに行くシーンもなんとも言えずいい。中華には、紹興酒でないといけないのだ、ということが、下戸の私でもよくわかる。蛇足ながら、何となく、両作品は、中国の名作、『山の郵便配達』を彷彿とさせる。どちらが、先かは知らないが、影響し合っているように思える。さらに余談。この作品の輸入には、私の元部下が絡んでいるとのことだが。

ほかに注目すべき作品は、ありすぎて、紹介するのも難しいが、やはり、代表作は、『愛のコリーダ』であろう。が、私は、採らない。テレビドラマ『時間ですよ』では、謎の男風間役で、相手役の篠ひろ子さん扮する飲み屋の女将が美しかった。

歌も歌われていて、知る人ぞ知る、『ヨコハマ・ホンキー・トンク・ブルース』では作詞を手掛けており、藤さんの代表曲となっている。最近テレビで、一生残すべき歌として、宇崎竜童さんが歌っていたが、難しい歌である。

因みに、奥様は、元日活大女優の芦川いづみさん。当時、浅丘ルリ子さん、吉永小百合さんに並ぶ、トップ女優であったが、結婚以来、全く世間から姿を消された。

3. 原田芳雄～父と暮らせば～

最近、惜しまれながら亡くなられた。直前に遺作の『大鹿村騒動記』の舞台挨拶に出られた。この作品は、遺作となったこともあり、大変に評価され、亡くなったあと、日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞された。その他、名作は幾多あり、今更どれをとということもないが、その中では、『父と暮らせば』を採る。言うまでもなく、井上ひさし氏の戯曲で、これまでも、こまつ座、その他で幾度となく上演されている。毎年新宿の劇場で上演されている程であるので、一度足を運ばれることを薦める。感動されること請け合いである。

広島に原爆が落とされた後、一人残された若い女性の話で、登場人物は、女性と亡くなった父親の亡霊である。二人芝居で、その二人だけで、話が展開する。話は、分かりやすい。戦争シーンなど全くない。家の下敷きになった父親を救えず、自分だけ生き残ったことを罪悪だと考え、幸せになることを拒否しようとする女性が、父親との対話の中で、幸せを掴もうと決意する話である。映画は、原作通りに製作され、戯曲通りのセリフで展開する。ひとつだけ、異なるのは、芝居では登場しない、女性を好きになる男性が、映画では、セリフもなく登場することだけである。主演は、宮沢りえさんと原田さん、監督は戦争レクイエム三部作の黒木和夫さんである。これだけでも映画ファンとしては、心躍る感があるが、正しくその通り。時間があれば、すぐにビデオショップにお急ぎなさい。

映画では、宮沢さんが高い評価を得ている。こ

の人も存在感のある女優さんで、この作品以外にも、『ぼくらの七日間戦争』、『たそがれ清兵衛』、『トニー滝谷』など枚挙に暇ないが、特に採りたいのは、『北の国から'95 秘密』の小沼シュウ役である。主人公の恋人役で、宮沢さんと田中邦衛さん扮する主人公の父親とが、手作りの露天温泉に入るシーンがある。『北の国から』の中でも、名シーンの一つであるが、当時、彼女は、拒食症でやせ細っており、それが又、役にピッタリであったのが、哀れであった。

これは、又譲り、本題に戻る。確かに、宮沢さんの清新な演技には、何の文句もないが、やはり、絶品は、原田さんの剽軽な演技でしょう。それが戦争の悲惨さ、当然の幸せを求められない、娘の悲しを際立たせているのではないか。先述の、『北の国から』でも、田中さんの引き立てで、宮沢さんが輝いて見えた。この関係を彷彿とさせる。本来、主役役者の宮沢さんは、名脇役の演技によって、引き立つ才能がある役者さんなのであろう。高倉健さん、石原裕次郎さん、ケビン・コスナーさんみんなそう。彼らと共演した女優さんは、みんな輝く。話がそれた。特筆すべきシーンは、いくつもあるが、じゃこ味噌を作るシーン、民話の一寸法師が鬼の体内に入り込んで退治する話、娘を逃がすためにジャンケンをし、わざと負けようとするシーン、いずれも素晴らしい。さすがの、黒木監督も、シナリオの素晴らしさに、映画特有の造り変えをする訳にはいかなかったのであろう。原田さんの舞台を見たかったが、多分、原田さんは、演じていない。舞台では、すまけい・梅沢昌代、前田吟・春風ひとみ、沖恂一郎・斎藤とも子、辻萬長・西尾まりなどがコンビで演じている。文庫本もあるし、私は、すまけいさん・斎藤ともこさんが演じている舞台をウォークマンに入れていた。

そうそう、原田さんとのエピソードといえば、私が、『中国の鳥人』のプロデューサーとして、横浜映画祭に招待された時に、『鬼火』で主演男優賞を受賞したのが、原田さんで、その時、サインを頂いたのを思い出す。見かけによらず、気さくな人であった。

他に特筆すべき作品は、多々あるが、黒木和雄監督の「戦争レクイエム三部作」（『父と暮らせば』もその一作）の『TOMORROW 明日』と『美しい夏キリシマ』、同じ黒木監督の『竜馬暗殺』、更に『オリオン座からの招待状』などがある。又、テレビの『不毛地帯』も適役ではなかったが、見所はあった。

4. いしだあゆみ～海へ Sea you～

歌手で女優は、桜田淳子さん、小柳ルミ子さん、武田鉄矢さんなど数多い。又、最近は少なくなったが、一部が、お芝居、二部が、歌謡ショーといった形の公演が人気があり、北島三郎さん、大月みやこさん、舟木一夫さんなど名演技を見せ、感心したものである。三分間で人を感動させる芸が、お芝居の技能を鍛え上げているのであろうが、その中でも、いしだあゆみさんの演技は、鬼気迫るものがある。演技なのか、本当なのか、よくわからない。近寄りたがたいものがある。『長崎ぶらぶら節』の舞台挨拶の後、東映本社でミニパーティが催され、主な出演者の方々が出席されていた。その中で、吉永小百合さん、高島礼子さんとは、話が出来たが、いしださんとは、ついに話ができなかった。周りに、人を近づけないようなバリアーがあり、私以外にも、近づく人はいなかった。俳優さんもそれぞれで、面白かった。

それはさておき、彼女は、別れのシーンの名人である。例えば、『北の国から』の、無理矢理に別れさせられ、小さい子供をおいて去っていく母親役、『駅 STATION』でも、同様、夫と分かれて子供を連れて、列車で去っていく妻役など、彼女の涙を流すシーンは、絶品である。鼻の頭が、すぐに赤くなるので、実際に泣かれているのであろう。状況はわからなくても、その人の気持ちが理解できるような表情の演技をする。『駅』でのあの敬礼のシーンを見て下さい。『夜叉』の妻役もそうであった。常に、控えめに耐えながらも、夫役の高倉健さんをじっと支える妻役。この作品の田中裕子さんの演技は、凄かったが、いしださんも、勝るに劣らない存在感であった。

数ある中で、何を採るか。私は、『海へ See you』のケイ役を採りたい。

これは、パリ・ダカール・ラリーに命をかけた男たちの物語で、主演は、高倉健。彼の役は、現役から身を引き、ラリーで、落伍した車両を片付ける、吊い屋で、実は、超一流の、ラリーをサポートするメカニック、本間である。監督は、名コンビの蔵原惟繕、脚本は、倉本聰、又、撮影が素晴らしく、佐藤利行。今では、本来の、パリからダカールまでのラリーは無くなったが、この映画を見ると、このラリーの凄まじさがわかる。映画は、これを忠実に再現しており、当時の日本映画の実力がわかる。

いしださんは、本間の前妻ケイ役で、今の夫で闘牛士のアントニオと共に、ラリーに参加する。この意味は、よくわからないが、どうも、ケイは、本間のことがまだ忘れられない様子。本間のチームは、ようように完走するが、ケイの車は、着かない。不幸にもケイとアントニオの車は砂漠で事故を起こしたのだ。本間は再び、本来の吊い屋となり、砂漠にマシンの残骸で十字架を立てる。これがあらましであるが、ラリーの途中に見せる、過去の思い出を交錯させながらの、いしだの様子がいい。ほとんどセリフもないが、その様子がいい。但し、最後に死ぬことはないだろう。不幸な結末は、好きではない。主要な作品は、上記にあげたが、他に、『青春の門 自立編』中で最も重要な役、インテリ娼婦、カオル役も良かった。又、特殊な作品であるが、テレビドラマで、何回か作られた、『消しゴムお亜季』という作品。演出は、私の好きな、久世光彦さん。一度寿司屋で見かけた。その時、話がしたかったが、なんとなくできなかった。そのあとすぐに亡くなられた。残念。この役は、依頼人の過去を消しゴムのように、消してしまう仕事人が主人公で、芦田伸介さんとの組み合わせが良かった。まあ、見るチャンスはないでしょう。このような作品に、田中裕子さん、ビートたけしさん、主演の『恋子の毎日』がある。視聴者を小馬鹿にしたような内容で実に面白かったが、これも、久世さんの演出である。

ここで、いしださんには、申し訳ありませんが、

久世さんのおすすめを挙げます。テレビドラマは、限りないので、名エッセイを紹介します。なんといっても最高は、向田邦子さんとのふれあいを綴った、『触れもせで——向田邦子との二十年』『夢あたたかき——向田邦子との二十年』でしょう。もう一つ、人生の最後に聞きたい歌、マイ・ラスト・ソング・シリーズ『マイ・ラスト・ソング——あなたは最後に何を聴きたいか』『みんな夢の中——マイ・ラスト・ソング2』『月がとっても青いから——マイ・ラスト・ソング3』『ダニー・ボーイ——マイ・ラスト・ソング4』『マイ・ラスト・ソング最終章』でしょう。素晴らしい、歌曲論である。

又、いしださん。大ヒットした『ブルー・ライト・ヨコハマ』に触れないわけにはいかないだろう、彼女は歌手なのだから。

5. 浅丘ルリ子～憎いあんちくしょう～

全盛時代の、日活映画は、彼女でもったといえるほど、石原裕次郎、小林旭の相手役を健気に勤めた。それはそれで、悪くない。それ以後の彼女の活躍を見ると、本音はどうであったか分からないが、吉永小百合さんや、芦川いずみさんと比べると、まず、文芸作品はない。裕次郎や小林旭が、わけもわからず、登場すると、途端に、浅丘さんが、登場する。途端に、映画になる。貴重な女優さんであった。客は、裕次郎や小林旭に酔うのだが、実際は、浅丘さんとからむ二人に酔っていたのだ。考えてみると、コンビというのは、決まっています、吉永さんには、浜田光夫、和泉雅子さんには、山内賢と決まっているのだ。浜田より、抜群にいい男の高橋英樹が、青い山脈では、ワキに回らざるを得なかったくらいである。浅丘さんにも印象に残る作品は、多数ある。しかしながら何といっても最高は、普通の映画に出ずっぱりであった時の中から、裕次郎と共演した、『憎いあんちくしょう』でのマネージャー役を採りたい。これは、石原裕次郎扮するスターが、ある美談に共感し、仕事を投げ捨て、おんぼろジープを東京から九州まで運転して届けるロードムービーで、それ

を浅丘さん扮するマネージャーが連れ戻そうと、ジャガーで追いかけるという、日本ではあまりない種類の映画である。

主演の、石原裕次郎は、彼にとっても名演であると思うが、彼のこの一本は、やはりムード歌謡映画であろう。『銀座の恋の物語』を押したいが、この映画の相手役も浅丘さんである。しかしながら、デュエットの相手は、浅丘さんではない。何故であろう。ところで、『憎いあんちくしょう』の主題歌は、難しくあまり歌われることはないが、名曲中の名曲である。「愛する喜び、思い出何処に、」裕次郎は、あまり歌はうまくなく、ムードだけで歌っているように思っている人もいるが、とんでもない話で、この『憎いあんちくしょう』、『骨』、『狂った果実』を歌ってみれば、如何に難しく、彼が如何に歌が上手いかわかる。

さて、『憎いあんちくしょう』、ジープを銀色のジャガーで追いかける浅丘さんの真剣さがいい。阿蘇の高原に到着した時、仕事を忘れて、本当の愛に目覚める、という話である。浅丘さんの代表作は、他に何といっても、寅さんの相手役のリリーである。これを代表作に挙げてもいいのであるが、シリーズであり、ここでは敢えて挙げないことにするが、是非、見ていない方は見て下さい。寅さんシリーズは、かなり嫌味な作品で、寅さん一家は、取り返しがつかないことを平気で言ってしまう。だから、国民的な名作だというのに、私はあまり採らないが、この、リリーとの絡みは、実に暖かい。優しい映画なのである。又、浅丘の役回りがいい。ドサ回りのクラブ歌手である。『星の流れに』が十八番であるが、上手くない。しかも相当に上手くない。こんなことを言ったら浅丘さんに怒られるが、歌が下手だからいいのだ。上手くては仕方がない。山田洋次監督に一度聞いてみたいが、監督は、浅丘さんの歌をどう思って、リリーに起用したのだろうか。寅さんは、ファンがリリーとの幸せを、願っていたのに、独身のままこの世を去ってしまうが、寅さんが亡くなってから、もう一本再編集して、追悼版が作成されている。その最後のシーン、田舎の名もないバスの停留所で二人が偶然出会うのであるが、その余韻か

ら考えるに、二人は、その後一緒に暮らしたのではないかと思われる。山田監督も、寅さんを永久に一人で暮らせるに忍びなかったのではないか。

その他の作品では、これも主役ではないが、石原裕次郎と吉永小百合さんが共演した、『若い人』での先生役が素晴らしい。その着物姿の美しいこと。原作とは異なるが、長崎の風景に全く馴染んでいた。吉永さんも名演で青春映画の名作である。一見をお薦めする。その他、先ほど述べた、石原裕次郎との共演の『銀座の恋の物語』、これは、アメリカの名作、『めぐり逢い』の日本版である。更に、裕次郎とのムード・アクション・シリーズ『赤いハンカチ』『夕陽の丘』『夜霧よ今夜も有難う』などもいい。

最後に、彼女の女優論を一つ。最近、彼女の対談を聞いたときのこと、彼女は、舞台稽古でも、どこでも、正装、正化粧でいくとのこと。女優はファンに普通の姿を見せてはいけない。彼女の女優にかける、思い、厳しさを見た。

6. 緑 魔子～夢千代日記—テレビ版～

ここで、一つ軽くいきたい。緑魔子さんである。今の若い人は知らないだろう。夫は俳優の石橋蓮司。石橋蓮司さんもいい役者さんで、私がプロデュースした映画、『中国の鳥人』に出演、横浜映画祭でもご一緒した。さて、緑魔子さんのことはあまり知らない。それほど意識して作品を見たこともない。しかし、一本だけどうしても見てもらいたい作品がある。映画ではない。NHKのテレビドラマシリーズ、『夢千代日記』である。これは、ある温泉町、皆さんご存知だと思いますが、あの今はなき余部鉄橋を渡るとこの温泉町なのである。その町の人々が主役のドラマで、主演は、言わずと知れた、吉永小百合さんである。主人公の夢千代は母親の胎内にいたとき、広島で被爆した「被爆二世」。原爆症を発病し、余命二年と宣告されており、この主人公とこれを取り巻く人々の物語である。もちろん、小百合さんの代表作であることに変わりがないが、このドラマには、沢山の名優が出てくる。正に、群像劇の感がある。

その代表として、田舎温泉町の踊り子さん役の緑さんを押しします。これは、テレビシリーズなので、見ることは大変に難しいと思いますが、ケーブルTVなどで放送されたら、シリーズとして是非ご覧になってください。その他の出演者、楠トシエ、樹木希林、大信田礼子、秋吉久美子、夏川静枝、ケーシー高峰、あがた森魚さんなど。

エピソードとして、一時期、四谷の目立たない、スナックに通ったことがあります。そこに、『夢千代日記』の原作者の早坂暁さんがいらして、たまたま、お会いしたのだが、早坂さんは歌がうまく、『満州娘』などを楽しく歌われていた。私も、早坂さん作詞の、「夢日記」、これは、夢千代日記を歌にしたもので、大月みやこさんの歌である。小百合さんの『夢千代日記』とは異なる。しかし、これも早坂さんの作詞である。これを歌うと、嬉しそうな顔をされて、「印税が入ります。」と言われたものである。ほとんど、緑魔子さんの紹介にはなっていないが、私にとって、緑さんは、あまりにも理解できない女優さんであり、この作品を紹介する以外、能力はない。

その代わり、『夢千代日記』の放映について述べると、次の通りで、アーカイブスには、入っているはずであるから、NHK オンラインで見ることができのではないかと。

- ・夢千代日記：1981年2月15日—3月15日放送、全5話
- ・続 夢千代日記：1982年1月17日—2月14日放送、全5話
- ・新 夢千代日記：1984年1月15日—3月18日放送、全10話

演出は深町幸男さんで、深町さんとは、『長崎ぶらぶら節』でご一緒した。又、時折、小百合さんらが踊る、『貝殻節』の音曲が何とも良かった。

7. 笠 智衆～姿なき一〇八部隊～

笠智衆さんの芸については、今更、私如きが紹介するまでもないが、ちょっと、風変わりな作品を紹介する。笠さんは、熊本県出身で、生家は浄土真宗のお寺だそうである。最初は、松竹の大

部屋俳優として出発された。ご承知のように、小津安二郎監督作品に続けて出演し、俳優としての地位を確立した。独特の、訛りのある、訥々とした、セリフが身上で、演技がお上手なのか、そうでもないのかよくは分からないが、いずれも名作ぞろいである。他の章とは、異なり、その他の名作から、述べる。

やはり、小津さんの作品の中から、挙げるべきでしょう。小津大山脈の中からどれかを取り上げ、これがいいとかあれがいいとかというのは、難しい。殆どが、普通の物静かな、中流の上の家庭の父親役であり、その中から、みなさんのお好きな作品を探すのがいいでしょう。『晩春』、『麦秋』、『お茶漬の味』、『東京物語』、『早春』、『彼岸花』、『お早よう』、『秋日和』、『小早川家の秋』、『秋刀魚の味』などは、どうでしょう。北鎌倉、京都などの景色の中で、いい味が感じられます。又、男友達の皆さんが、いい。変わった作品では、『東京暮色』はどうでしょう。

それから、この頃のプロの役者さんは、このあと述べる、志村喬さんもそうですが、どうでもいような映画に、どうでもいような役で沢山出られています。役者は、断らない。こんな根性が見えるような気がします。その中で、この一本は、『姿なき一〇八部隊』です。棟田博原作「サイパンから来た列車」を映画化した作品である。題名の通り、サイパンで玉砕した部隊が、深夜、列車で東京駅に到着、限られた時間の中で、気になる家族らの様子を見て、又、明け方の列車でサイパンに戻っていくという話である。秋吉中将役が、笠さんで、東京駅頭で訓令する時の、姿勢の良さが、映画のすべてを表しており、見る方も背筋が伸びる。戦争後の家族、恋人、息子の様子を見て、幸せに思う人、不幸な結果に嘆く人、様々である。おそらくは、遠くの国の島やジャングルで、亡くなられた方たちは、みんなそういう思いを胸に亡くなられたのであろう。因みに、倉本聰の脚本で、同じ原作が、『帰国』という題名で、脚色されており、舞台版とテレビドラマ版がある。「サイパンから来た列車」に感銘を受け、50年以上温めてきた作品だそうである。このうち、テレビドラ

マ版は、数年前に、制作され、長瀬剛、ビートたけし、小栗旬などが出演した。これも悪くはないが、やはり、映画の方が。

さて、笠さんは、小津作品後も活躍は続き、山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズに御前様として出演。これも笠さんの代表作となった。又、何かで読んだことがあるが、鎌倉に住まわれた笠さんは、お土産には、必ず、鳩サブレをお持ちになったそうである。いかにも、笠さんらしいエピソードであると思う。

8. 嵐寛寿郎～『明治天皇と日露大戦争』～

嵐寛寿郎、アラカン、子供の頃は、よくわかりもせず、〈あらしかんじゅうろう〉と呼んでいた。何といっても、我々にとっては、鞍馬天狗のおじさんである。鞍馬天狗役者は、沢山いるが、我らの鞍馬天狗は、〈かんじゅうろう〉であった。ただし、今調べてみると、彼は、私が、小学校四年くらいの時には、鞍馬天狗は、やめているので、それほど、多くの作品は、見ていないのかもしれない。

この役者この一本は、何といっても、1957年の『明治天皇と日露大戦争』（新東宝）の明治天皇役である。通常、天皇役は、後ろ姿とかが、多かったらうから、演技をする天皇役者は、初めてではなかったか。新東宝の大蔵貢社長に口説かれたそうで、寛寿郎さんは威厳ある明治天皇を演じ、作品は空前の大ヒットを記録した。これを採りたい。彼は、既に、大時代劇役者であり、私など戦後の若輩者が、どうこう言う立場ではないのであるが、例えば、長嶋さん世代の野球ファンが、伝説の川上さんを尊敬するようなもので、巨人といえば、赤バットの川上さんなのである。

当時、小学校四年生くらいか、映画にはよく行った。新東宝は、思案橋を入ったところの東館という映画館が封切り館で、ややマイナーな感があった。両親とは、東映や松竹などにはよく行ったが、新東宝といえば、私の祖母と、大映といえば、伯父とであった。子供ながら使い分けていたのである。新東宝は、三本立てなどが多く、楽しみであっ

た。さて、明治天皇の映画には、子供でもまいった。日露戦争の概要は知らないではなかったが、戦争映画とか、内容の是非とかは、まあ、お許し願うこととして、日露戦争は、大変な戦争であった。特に、二百三高地の攻防は、凄惨を極めた。早く、占領しないことには、旅順港を攻撃できない。そこに、バルチック艦隊が、合流したことには、日本の敗戦は、確実ということで、なんとしても、落とさねばならない。そこに、乃木大将の、苦悩があった。国内では、乃木さんの更迭論があったのであるが、天皇は頑として、首を振らなかった。この恩を乃木さんは、一生忘れず、後に、天皇崩御の後を追い、夫婦で、殉死することとなる。天皇の、アラカンさんに対し、乃木役は、それ程大物ではない、林寛さん。しかし、役者が目立ちすぎず、これが良かった。乃木役は、仲代達矢、田村高廣、柄本明などが演じている。さて、天皇役は、なんといってもアラカンさんであろう。彼の声は普通でなく、これも際立っていたように思う。

その後、我々は、もっと違った形で、アラカンさんにお世話になることとなる。1963年、東映で『昭和侠客伝』に出演、以後、東映の任侠・ヤクザ路線映画、また松竹や日活のヤクザ・ギャング映画にも多数出演することとなる。又、同年の、『十三人の刺客』で片岡千恵蔵と共演したが、同作は、命を懸けた、集団闘争時代劇の傑作で、このアラカンさんもよかった。最近も役所広司さんでリメイクされている。任侠映画の中で、なんといっても素晴らしかったのは、『網走番外地』の鬼虎さんである。とにかく、かっこよく、主人公の高倉健を助ける、脇であるが、常に端正で、主人公よりも存在感は高い。

9. 志村 喬～七人の侍～

知る人ぞ知る名優である。挙げればきりがない程の、名作がある。しかしながら、彼は、笠智衆さんと同様、どんな役でも、出演している。笠さんと違うのは、女賭博師などの任侠物にも出演していることだ。理由はよくわからない。

黒澤明の第一回監督作品『姿三四郎』で老柔術家、村井半助を演じ、それ以来黒澤に重用され、黒澤映画への出演は多い。特筆すべき作品は、黒澤監督の『野良犬』、拳銃を盗まれた、三船敏郎扮する若手刑事と組むベテラン刑事役を演じた。これは、映画としても素晴らしい。次に、『生きる』。この映画では、癌で余命幾ばくもないことを知り、最後の仕事に命を懸ける、市役所の万年課長を演じた。公園のブランコで、〈命短し、恋せよ乙女〉と歌うシーンは、映画史に残る名シーンであり、これを、この一本にあげてもいいのであるが、やはりこの一本は、『七人の侍』である。

志村さんは、この映画で、侍達のリーダー勘兵衛役を演じた。特に、最初のシーン、登場するや、途端に観客の心を鷲掴みする演技で、その後の展開が心より期待される。勘兵衛がある宿場に差し掛かると、あばら家に、一人の無頼漢が赤子を人質に立てこもっている。勘兵衛は、それを見るや、途端に、鬣をそり始める。そして、さも頼りなげに、あばら家に向かうのである。さて、どうなるか。映画とは、そういうものであろう。これを、もとにして、アメリカで、『荒野の七人』という映画が作られ、やはり、最初に、ユル・プリンナーとスティーブ・マックイーンによって、印象的なシーンが展開するが、面白さは、日本の方が上である。

その他、『ゴジラ』以来、怪獣映画・特撮映画にも多く出演、この種の映画で重要な役どころ、重厚な科学者役を演じた。主要な作品を挙げると、『虎の尾を踏む男たち』、『ゴジラ』、『ゴジラの逆襲』、『三十六人の乗客』、『用心棒』、『モスラ』、『椿三十郎』、『天国と地獄』など。そして、『男はつらいよ』では、さくらの夫、博の父親で、厳格な教授役を演じ、息子の結婚式で、感動的な挨拶をした。

10. 植木 等～あした～

言わずと知れた、クレージーキャッツの大御所で、無責任サラリーマンの代名詞である。実際は、日本を代表する俳優、コメディアン、歌手、ギタ

リスト、タレントである。父親が僧侶となったため、僧侶の修行をされ、お経も読まれたようだ。クレージーキャッツに参加し、日本テレビの番組『シャボン玉ホリデー』に出演、「お呼びでない？」との歴史に残るギャグで爆発的な人気を得た。その後、東宝映画『ニッポン無責任時代』に出演し、大ヒット。以降、「無責任男」をキャッチフレーズに数多くの映画に出演し、『スーダラ節』など数々のコミックソングをヒットさせた。

しかしながら、無責任物は、植木さんのほんの一部にしかすぎず、真面目な映画で名演技を示した。その一つが、『新・喜びも悲しみも幾歳月』。これに父親役で出演し、数々の賞を受けるなど高い評価を受けた。これは、大ヒットした、『喜びも悲しみも幾歳月』からおよそ30年、木下恵介監督が再び灯台守夫婦の13年に及ぶ姿を描いた人生ドラマで、植木さんの役は、主人公の父親役。主人公とその父親の関係が重要なテーマになっており、飄々とした老父を演じた植木さんが、同年度の助演男優賞を絵なめにした。

これも名演技であるが、私は、一味変わった映画、大林宣彦監督の『あした』を採りたい。大林監督得意の、尾道市を舞台にした、『新尾道三部作』の二作目に当たる。前作の『ふたり』と同様、人の死が重要なテーマになっている。原作は、赤川次郎の小説『午前0時の忘れもの』。小型客船の乗客九名が突然の嵐で、船が沈没し、全員死亡

する。様々な人たちが乗っていたが、その残された恋人、夫、妻、家族のもとに、数ヵ月後、「今夜午前0時、呼子浜で待っている」というメッセージが届く。それぞれの人達は、不可解な思いを抱きながら、呼子浜の待合所に続々と集まってくる。その中のひとり、ヤクザの親分で、愛する老妻と孫をなくしたのが、植木さんの役である。奥さんが、津島恵子さん。それ以外にも、旅をしている、若い女性、ヤクザの子分、別れた恋人同士、愛人、子供などが絡んで、暖かいドラマが展開していく。

さて、船の乗客は、時間が来ると、当然、沈没した船で、再び、海底へ戻っていかねばならないのであるが。抑え気味の植木さんの演技が、抜群に良かった。津島さんとの老夫妻の関係も良かった。又、これは、芝居化もされており、これもいい出来ではあった。

年末になると、植木さんの思い出が蘇る。毎年、年の暮れ、クレージーキャッツのショーが有楽町の宝塚劇場で開催された。毎年のように、観劇に行ったら、彼らの、お芝居と音楽に、年末を迎えた喜びを感じていたものであった。それほど、豪華なショーであった。又、その他の推薦する作品は、やはり『無責任シリーズ』である。どれでもいいから見てください。面白いこと請け合いです。

以上